

NIE(教育に新聞を)実践校 新聞記者による防災授業 (令和2年10月5日)

10月5日、明石西高校の体育館に1年生全員が集まり、神戸新聞の三好正文さんに防災についての授業を行っていただきました。その授業の様子が、10月6日の神戸新聞明石版に掲載されました。

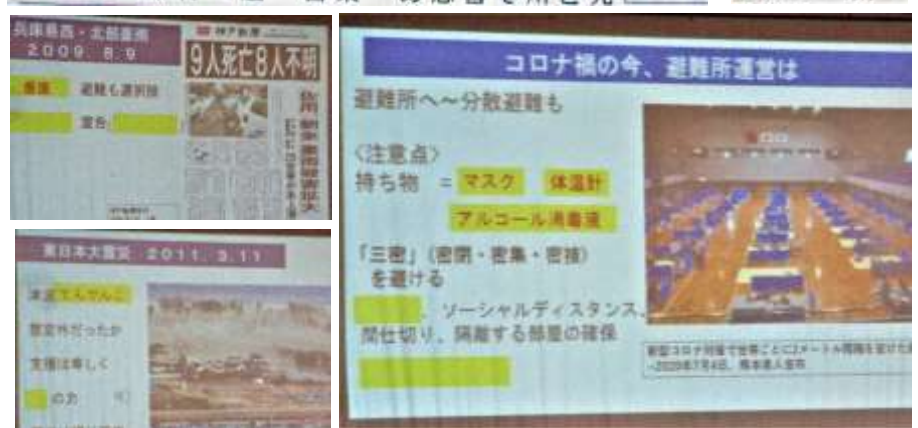
授業の内容は、阪神・淡路大震災時の記者として体験やその後の記者生活での様々な自然災害の取材、また、現在の新型コロナウイルス対策を意識した避難所運営などについて、新聞や新聞記者としての使命や心構え(安全安心の情報提供、読者を励ます記事づくりなど)にも触れながら話されました。

時々、生徒に「新型コロナウイルス対策と避難所生活の心得」(マスク持参、換気、手洗い、検温、ソーシャルディスタンス...)などについて質問をして、予習してきた生徒たちが答えていました。

10月5日の授業までに、「総合的な探究の時間」の中で、阪神・淡路大震災の時の新聞記事や写真を見るなど防災について学習してきましたが、当時の記者の体験を直接聞き、生徒は多くのことを学びました。記事の中の感想のほかに、10月5日の授業後に書いた感想をいくつか紹介します。



阪神・淡路大震災などの災害をテーマにした授業が5日、明石西高校(明石市二見町西一見)であり、1年生320人が参加した。神戸新聞NIE推進部の三好正文アドバイザーが講師を務めた。同校は本年度、日本新聞協会のNIE実践校に指定された。校内には神戸新聞の記事や写真パネルが展示され、生徒は災害を想定した自身の避難計画を作成するなど事前学習をして授業に臨んだ。三好アドバイザーは同震災の当日、全壊した神戸・三宮の本社で宿直勤務だった。災害時の新聞の役割として「一つ一つの災害から災害をテーマに行われた授業(明石市二見町西一見)と話した。



- ・三好さんは、阪神・淡路大震災の当日に起きていて、一からゆれを感じた方の話を聞いたことは良かったなと思います。この世界には百パーセント安全という場所はないということを知りました。現在はコロナがはやっており、もし地震がきてしまったら、避難所とかで密になってしまいますので、今だけは来てほしくないなと思いました。
- ・新聞記者さんだから聞いた話が多かった。母や父に話を聞いたが、また違った方向の話だったので初めて聞いたことや、驚いたことがあった。まだまだ知らないことがあるのもっと知りたいです。そして次は自分たちが受け継いでいく番なので、しっかりと後世に伝えていきたい。そして、新型コロナのことについても聞いたので良かったです。

この新聞記事を書いてくださった川崎記者は、数年の記者経験だそうです。授業の最初に、三好記者が阪神・淡路大震災当時書いた記事を、生徒の前で朗読していただきました。川崎記者も生徒たちと同じく、25年前の阪神・淡路大震災を知らない世代です。明石西高校の教職員の中にも知らない世代が少なからずいます。今日の講演は、生徒ばかりではなく、教職員の学びともなりました。

